

物

心

心 (承前)

山田次郎

併し乍ら尙考へてみるのに、感覺的性質の心的直接態と自體的な物の意味的非現前態との間の關係が結局所謂反省的連結のそれであつて決して「刺戟」といふ如き外的な働きかけのそれではないといふことが右に述べられたのであるけれども、實は空間的に機械的な働きかけの如きものとしての所謂物的因果關係が結局やはりそれと同じ反省的連結の關係といふものに歸着するといふのが上述に於ける一つの結論ではなかつたか。

この疑問に對しては次のやうに考へられる。即ち、上述の球の衝突の場合に於ける如き先行態と後續態との間の關係が確かに時間的であつて、その限り生の反省的一轉を含むことに間違ひはないとしても、そこに先後する生の二内容、何れも既に意味的に解釋され「物化」してゐる限りの現前存在であり、その意味に於いて、それらはつまり生の同一の次元乃至階層に屬する内容であつたのであるが、之に反して、今の場合の所謂反省的關係は、實は既にそれら經驗的物的事象の夫々の同一的存立の中にも現に働いてゐる如きものとしての、論理的無時間的な構造の含むそれであつて、従つてそこに反省的に連なる兩契機といふものも、先きの場合に於ける如く互に對等に並立し得る意味のそれではなくして却つて生の直接態と間接態としての異次元的内容であり、而もそこに反省的な先後の關係は、先きの場合の一方的であつたのと異つて全く相對的である（性質的存在態は意味の出立點であり又歸着點である）といふ

ことが考へられるのである。

云ひ換へれば、ひとしく反省的に連なるといふこと(主觀的原始的時間性)の中にも、反省的に連なるものが何れも物的間接態同志であるか若しくは心的直接態同志であるかとする場合と、それらの一方は心的直接態であり乍ら他方は物的間接態である場合とは、明らかに區別さるべきであると考へられるのであつて、前の場合にのみともかくも意識の對象界に關するとしての時間關係といふものは成り立ち、之に反して後の場合には本來客觀的には無時間的な論理的構造の關係が成り立つべきものであらうといふことが考へられる。

そこでこのやうな見地に立つて先きの所謂物心間の因果關係といふものに考へを及ぼす時、そこに一應時間的規制の關係と考へられてゐるものが實は無時間的な構造のそれであるのではないか、而して若しさうであるとするとするならば、それにも拘らずそこに自然的に一種の時間的規制關係が考へられようとするには、やはり何か然るべき理由がある筈であるといふことが先づ豫想的に考へられる。そこで我々は先きに所謂感覺心理學の立場に沿うて今少しく考へを續けて行つてみようと思ふ。

先きに述べたやうに、何らかの意欲的行動的立場に照らしてみる意味に於ける所謂實用的な抽象的同一性に於いて顧みられるところの性質的體驗が、その相關の法則的可能性(自己保持性)に即して夫々何らかの外界的實在物となるのに對し、そのやうな——即ち上の例に即して物理學的乃至化學的な——抽象的恒常性の立場からは暫く度外視せられ乍らもやはりそれ自身の間に——例へば對比の如く——一種の法則性を見出されて來る如き性質的契機に關しては、恰も先きの所謂外的諸實在がそれら自身畢竟或る性質的相關の法則的確約そのものに外ならぬものとして當然そ

れら抽象的諸性質に關する時間的體驗の所謂「現象」を説明するものであつたやうに、やはりそれらの性質的體驗——即ちこの場合物理學乃至それよりも一層異質性を豊富に保持するとしての化學が顧慮するよりも更に具體的なそれ——をば、その法則的相關性に於いて「現象」的に説明すべく、その比較的な直接態の背後に所謂「實在」的に想定せられてくるものが即ち、かの身體(生命的物質)といふ生理學的乃至生物學的對象特にその中なる所謂神經系統でありそこに經過する所謂神經過程であるのである。

かくて例へば、同じ或る灰色が赤に圍まれると青に圍まれるとではその色合を異にするといふ如き、單なる物理學的外的實在の立場のみからは説明し難い現象(逆に云へば物理學的法則性は實はそれを暫く度外視する所にのみ成り立つてゐるのである如き現象)も、或る波長をもつ電磁波としての物理學的實在に所謂刺戟せられることによる感覺器官眼底の或る特殊の物的變化が自身の或る獨特の經過法則に従ひ所謂神經興奮なる或る特殊の物的過程として結局大腦皮質と呼ばれる身體部分にまで傳へられるといふ如き一種の背後的事態がそこに考へ加へられる時、始めて所謂説明せられるのであり、同様にして、かの「皮膚に觸れるペン先」と「皮膚のその部分に感ぜられる或る觸の感覺」との間の關係も、後者は具體的に前者の物的——特に科學的に數量的な——同一性に對し種々微妙に變様し得て相應の恒常性が嚴密を缺いて居り、そこにやはり單なる外的實在の外に、所謂皮膚としての感覺器官から大腦皮質に至る神經過程といふ一種の身體的生理學的事態が考へ加へられることによつて、始めてその相應關係の云はば緩みといふべきものが説明されて來ることとなるのである。

それではその所謂説明せられるとはどういふことであるかといふことを今少しく具體的に追究してみよう。例へば

ここに或る灰色の紙片がある。先づ自然的に素材には、その灰色は、直ちにその紙片に屬して外界的に存立して居り、紙片といふ一外界物の構成要素として當然その外界物のもつ同一性乃至自己保存性といふものに参してゐる。否寧ろ凡そ「ある」ものが自身同一的であらうとする——そのまま未來へ續かうとする——といふことはもとと生一般に通ずる根本事實であると云つてよいのである。そこでその同一性がその自然的な傾動のままに保持せられ未來への情性的期待が満たされる限り生はそこに安堵しつまり別に「問題は無い」のである。ところが云ふまでもなくその灰色は外界的事情の如何に應じて種々多様に變化するものなのであつて、例へば赤い光の中では赤味を帯び青い光の中では青味を帯びるのである。そこでかやうに同じ（と期待される）灰色が或る場合赤く或る場合青く見えるといふことは生にとつて確かに一つの「問題」であつて、生はそこに一種の不安を感じる。併し乍ら、赤い光の中で赤味を帯び青い色の中で青味を帯びるといふことは實際無數の灰色について無數の場合に經驗せられる事であり、そこにつまり一種の外的實在「光」といふものの考慮に於いて事態の相應的變化に關する法則性といふものが一旦確立すれば今新しく目前の灰色が赤の光の中で赤く變り青の光の中で青く變つてもその事は畢竟右の法則的同一性（未來的期待）の立場がそこにあらためて自己の一特殊的限定態を見つつかその妥當性を自證すること（の機縁）たるに外ならぬのであつて、その意味に於いてそれは「當然なこと」つまり説明せられてゐることでありもはや「問題」ではないことになのである。

然るに一應右の如くして所謂説明せられた灰色の變様も、その同じ灰色の紙片について適當に夫々赤色の紙と青色の紙とで圍まれた二つの部分が一方は稍綠色を帯び他方は稍黃味を帯びて同じ灰色に見えないといふ新しい事態に關

しては再びここに「問題」を生じ、紙片に反射する光といふ外的實在を考慮する限りに於ける從來の立場からの法則的期待はそこに裏切られ改めてその「説明」が求められてくるといふことになる。かくて例へばヘリングによる網膜中の所謂 Sehsstoff の「異化作用」と「同化作用」といふ如き考へに於いて、網膜の或る箇所にはける或る種の興奮がその近傍に反対の興奮を生ずるといふ如き一種の生理的物的事象がそこに考へ加へられることによつて、一先づその「説明」が得られると考へられるわけであるが、それが一體何故「説明」になるのであるかと云ふに、それはつまり、その生理的物的事象のそれ自身の法則に従ふ経過として實は唯想像せられるもの（が色に關する體驗の経過と一々呼應すると考へられ、前者の物的に安定的な法則的同一性の立場から後者は所謂當然として期待せられ且納得せられる如きものであると考へられるによるのである（實を云へばその生理的物的事象といふのはもともと視覺的體驗の或る相關的變化に關する法則性そのものをその安定性に關して物化し實在化した所に考へられてゐるのであつて、従つてその想定が右の如くその體驗の経過を——或る程度まで——説明するといふことは固より當然な事なのである）。

云ひ換へれば、自然的に素朴には例へば灰色の紙としてそのまま外界的に獨立してゐる（と考へられてゐる）ものが、そこに反射する光といふ物理學的事態の考へ（加へ）られ、更にはその光によつて刺戟的に規定せられつつも或る独自の経過法則をもつものとしての所謂生理學的事態の考へ（加へ）られることによつて（いかにその事情が變つて來るか）と云ふに、もともと灰色の視覺體驗と種々の觸覺的體驗その他との間の法則的關聯に即して考へられ従つてそれらの體驗の事實的繼起を所謂當然として期待しつまり説明するものであつたもの（たる灰色の紙）が、やがてその上に尙その灰色に關する種々の變様をも亦右の體驗群——即ち、その法則的相關性に於いて「物」の成り立つ基礎とな

り従つて一旦成り立つた「物」の立場からは却つて逆に所謂説明せられるものとなつてくる「心」的生内容——の中に含むことになり、更にはそのやうな色に關する變様の體驗が尙一層の複雑さ微妙さを加へてくるといふことになるのである。

その意味に於いて要するに廣く物(的實在)といふものは、自然的に素朴な意味のそれにせよ物理學的な意味のそれにせよ又生理學的な意味のそれにせよ、必ず體驗の心的直接態に關する何らかの法則的相關性に即し従つて常に心的異質態の直接的非合理性に對する或る合理化段階として意味的間接的に成り立つてゐるものなのであつて、唯その中に就いて例へば物理學的實在の合理化する心的體驗は比較的に抽象的であるがそれに比しては所謂生理學的實在の關するそれは一層具體的であるといふ如き段階的差別が考へられるに過ぎないのである。

所謂物化と即する合理化といふものは、以上の考察によつて明かなやうに、總じてそこに考慮せられる性質的體驗の時間的連結に於ける或る法則性乃至恒常性(自己同一的保持性)といふもの——そこに成り立つ生の一種の惰性、その期待と満足——に基いてゐるのであつて、その限りそれは、そのやうな法則性乃至恒常性に於いて存立するものとしての時間的連結そのものの含んでゐる一種の深い(斷絶の)神祕を解く(合理化する)ものでは決してないがこと明らかなのである。

例へばここに特に視覚に關する神經過程といふものをとつて考へてみるのに、それが身體内部的とはいへどもかくも一つの空間的事象である限り、畢竟或る可能的な(間接性を意味する)視觸の性質的體驗を通じ、それらの相關に關する或る法則性に於いて意味的に(自體としては非存在的に)成り立つてゐるのであることは、身體外に例へ

ば一枚の紙片が存在し又そこに反射してゐる光といふものが存在する如きと形式的に少しも異なる所は無いのであるが、唯この特に身體内部的に成り立つ一種の物的事象に關しては、その空間的な物的變化が、視覺的性質的體驗の差當り非空間的な心的變様に對して、他のいかなる外界的事象の變化よりも優れて精密に相應して居り、而もその事は所謂視覺器官としての眼底に於ける神經系統の末梢から所謂大脳皮質としてその中樞部に進むにつれて益々その精密の度を加へると考へられ、ここに特にその大脳皮質に於ける或る特定の神經過程といふものが最も具體的な意味に於ける視覺的心的體驗に關してそれを所謂説明するものとなるわけであつて、而もその所謂説明に於いては、一種の物的過程として（或る安定的な法則性を代表するものとして）の當該神經過程がその（條件的先行的）變化に關してそれと精密に呼應する筈の視覺的心的體驗の變化をば所謂當然として期待せしむる如きものであるといふ（その具體相に關しては差當り單に想像される以上に多くを出ない）事實の存するのみであつて、そのやうな一種の空間的物的事象たる神經過程の或る段階と、それに對し生が必ず反省的に一轉する關係に立たざるを得ない非空間的に心的な或る視覺的性質との間に於ける一種の時間的連結そのものは、あくまでも唯その連結が法則的に恒常的であるといふことが云はれるのみであつて、その連結そのものとしてはその具體的本質に關し何ら明かにせられる所が無いのである。

而もその事は、恰もかの灰色の紙片が、その直接の視覺的體驗の意味的に解釋せられつつ「物化」した資格に於いて、或る——例へば手を伸ばしてそれに觸れる場合に於ける——觸覺的體驗の「心的」出現をばやはり當然として期待せしめるものであり従つて又（事後的には）それを説明するものであり乍ら、而もそれら物的心的二面の間の連結そのもの（その單なる恒常性でなく）を別に問題としてゐなかつたのと形式的に云つて全く同様であると云へる。

それならば、恰もこの後なる場合に於いて、そこに恒常的に連結する心的性質が結局その灰色の紙といふ外界的物の一事象に歸着しつゝ謂はばそれを構成する一面であると同様に、今大脳皮質に於ける或る特定の神經過程といふものに就いても亦、或る可能的視觸を通じて（その意味的解釋に於いて）成り立つところのその物の物的存立態とあくまで恒常的に連結するものとしての或る視覺的心的性質は、結局その神經過程といふ物的事象そのものの或る一面としてそれに歸屬するものであらうか。云ひ換へるならばかの灰色若しくは或る手觸りの如きが嘗て素材に紙片そのものに屬して夫々その一構成面であつたと同じ意味に於いて、今事態の生理學的反省に於いては、そのやうな性質の心的存在は、結局大脳皮質に於ける或る特定の神經過程といふ物的事象の一構成面を成すのであらうか。

併し乍らここで先づ直ちに氣附かれるのは次の事柄である。即ち、右に例へば同じく灰色とは云ふものの、素材に紙片そのものに歸屬すると考へられる場合に於けるそれは、既に直接の單なる性質的存在態が何らかの意味を含んで——差當り例へば霧の薄明の場合にも似て遠近もさだかならぬ純性質態がやがて或る距離に面を成して明確化し、その際の眼に於ける所謂調節作用の性質的體驗の如きものを手懸りに可能な視覺的觸覺的乃至運動感覺的諸體驗が行動的に隨時實現し得べきものとして無數に想像せられつゝ——所謂「外化」したものであり、之に反して今生理學的に立ち入つた反省に於いて大脳皮質の或る神經過程といふ物的事象にその一面として歸屬するのではないかと考へられてゐる場合に於けるそれは、云ふまでもなくそのやうな「外化」以前の端的な性質的直接態そのものでなければならぬといふことである。

といふのは、その意味に於ける性質的直接態といふものは嚴密に云つて實は未だ何らの空間性をもたぬものであり、

その所在を例へば「外」に對して「内」といふ如く規定するのも、單に「外ならぬもの」といふことの外に、實はその變化に關する恒常的先行者としての腦髓過程の空間的位置に準じて、實は意味を成さぬその位置といふものが（何故意味を成さぬかと云へば、意味は關係に於いて成り所謂直接態は差當り性質的統一に於いて單獨的なのである）唯漠然と考へられてゐるに過ぎないのであつて、その非空間性乃至超空間性といふものにこそ、その所謂心的性格は成り立つてゐるのである。従つて若しそれをば、何らかの物に歸屬せしめる意味に於いて「物化」しようとするれば、その事は必ず右に述べた如く、何らかの可能的行動的體驗を意味的に含んでの「外」化である外なく、而もそのやうな行動を介する「外」化に於いては、身體「内」部的な所謂神經過程の如きものは當然謂はば踏み超えられて仕舞はなければならぬのである。勿論それは或る場合、例へば生理學的追究に於いての如く、身體内部的物的事象就中腦髓過程といふ如きものにまで外化するといふこともあるには違ひないけれども、その場合の所謂身體内部的物的事象は、既にその追究者そのものの立場からはあくまでもやはり「外」的であるのであつて、そのやうに外化した或る直接的性質の眞の條件的先行者たる、當該追究者自身の腦髓過程がそこに既に「踏み超え」られ無視せられてゐるといふ事情は一般の場合と少しも異なる所が無いのである。——この事は、屢々云ふ如く一般に感覺的性質の位置附けといふことが、嚴密にそれ自體としての單獨態について位置を云ふことの不可能であり無意味であるところの性質的現前態について、何らかの行動的體驗と相關的なその廣義の強度的變化を考へつつ、その事柄の意味的含蓄に於いて、畢竟その「刺戟源泉」の位置を指摘すること（この事の生物學的意義は明白である）に外ならぬのであることを考へれば、その當然さをよく理解することができるのである。（——尚可能的行動的體驗に關する意味的含蓄が感覺

内容に關する空間性の「存在的」外觀を變貌することに關しては、その一つの好い例としてかの視覺的空間の「上下」的差別を擧げることができると思はれるのであつて、周知の如くそれは適當に眼鏡を用ひることにより任意に逆轉せしめられ、その限り入射光線と網膜との物的關係——それよりする純視覺的に存在的な一義の規定性——といふものからは自由でなければならず、事實そこにはその眞の規定者として廣義の觸覺に關する行動的體驗の意味的含蓄——その大脳皮質的條件——といふものしか考へられないのである。更に、感覺的性質の「外化」が直接の身體的條件を常に「踏み超える」といふことに關しては、そのやうな「外化」に於いてのみ廣く科學的な實驗觀測といふものは具體的に成り立つといふことを考へる時、通常物界の窮極的闡明を期する立場として生命的事象の如きも結局はそこに還元されるべく考へられ生理學的追求の如きも従つて所謂「外化」的方法を通じておのづからその方向へ傾動するところのものとしてのかの物理學的世界なるものが、實は却つてその根柢に眞の生命的事象を既に豫想して立つてゐると云はなければならぬのではないか、生理的有機性が物理的無機性の寧ろ根柢乃至眞の具體相であらうといふことは尙別の見地からも云ふことができると思はれるが、差當り右の事情からもその事が考へられ、物を介して物を測るといふ根本的制限は一層深くは身體を介してといふ條件をもつて居り、結局生命的事象の自己追究といふことにこの撞着は極まると思はれるのであつて、物理學の近時の發展もそのやうな自覺を漸次反映しつつあるものとも云へ、そのやうな見地からして例へばかの「作用量子」の特定の有限性の如きものも、實はそれが單に物理學的な問題であるのでなくして寧ろ「精神物理學」的な問題であるのではないであらうかといふやうな事も私考せられるのである。

さてかやうに考へてきると、かの灰色が自然的に一枚の紙片を構成すべくそれに歸屬したと同じ意味に於いては、決して何らかの感覺的性質がそのまま大脳皮質に於ける神經過程といふ一種の空間的物的事象そのものに歸屬するとは考へることが出来ないといふことが明白である。即ち總じて感覺的性質といふものは、それを何らかの「物」に歸着せしめようとする限り、それは右の所謂大脳皮質的過程が現にかく物的に結果し來つた原因としてのその所謂刺戟源泉の所在にまでその大脳過程の如きを飛び超えて「外化」して了ふのであり、之に反してそれをその直接の性質的現前態に即してみる限り嚴密に云つてそれは未だ何らの空間性をもたず、その所謂内在性の如きも實は外的實在の意味的な間接性に對する存在的直接性と、それに加へてその物的な條件の先行者たるものの身體内部性といふものが唯漠然とそこに考へられてゐるのに過ぎないのである。云ひ換へれば、感覺的性質は眞にそれ自體としては大脳過程の物的性格に對してあくまで心的であり、従つて又大脳過程に對するその連結關係も既に「外化」し「物化」した意味のそれに關する如く空間的に構造的な一面と他面の關係ではなくしてあくまで一方的に時間的な繼起の關係であると考へなければならぬのである。即ち、かの灰色の紙片に就いては、それに關する可能的な視覺的乃至觸覺的體驗相互の間にその何れもが意味的な「外化」に於いて同一物的對象の夫々の面を成すものとして何ら一義的な先後の差別が無く、何れが現在の基底となり何れが未來的に豫期せられようとする任意であつたのと異つて、今ここに大脳皮質に於ける神經過程といふものに就いては、自らの感覺器官から自らの大脳皮質にまでその生理的過程を追跡して來る（假想的意識は必ずやその追跡が大脳皮質の或る箇所に及ぶと同時に——否、反省的一轉に於いて實は必ず直接繼時的に——從來の一種の空間的物的過程（として意味的に「外化」された何らかの感覺的性質）

から或る感覺的性質の非空間的に心的な直接感受感への突如たる移行を経験するであらうし、而もその時間的順序は決して逆になることは無いと考へられるのである。——とは云へ、實際に於いてそのやうに自らの神經過程を一種の外界的事象として自ら追跡するといふことは、その事自體その一種の外界的事象についての何らかの視觸的經驗に關する別途の神經過程(その大脳皮質への到達)といふものを豫想しなければならず、神經過程の進行速度を考慮して時間の關係から云つてもそれは明らかに不可能であり、従つて通常は何らかの外界的實在が自らの身體と或る外的關係に立つこと(物的事態に關する)認知と共に直ちに何らかの感覺的性質の(心的)出現がそれに繼ぐといふことになるのであつて、而もその時間的な繼起の關係は右の感覺的性質がその心的直接態に於いてみられる限りあくまでやはり時間的繼起の關係以外のものでなく、唯その感覺的性質がもはやそれ自身としてならぬその意味的な「外化」に於いて見られる限り、刺戟源泉としてのかの外界的實在へのその歸着に於いてはじめてそこに所謂空間的な一面と他面といふ構造的關係が成り立つて來ることになるのであるが、そのやうにして成り立つ空間的構造體といふものはいかなる場合にもはや決して自らの大脳皮質的過程であり得ないことは明白なのである。

かやうに考へて來て結局、感覺的性質の出現に關する所謂刺戟の事態に就いて、そこに自然的に一種の(物心間の)因果關係の考へられようとするこの少くも決して無理からぬことが先づ明らかである。上に我々は、物的なるものと心的なるものとの間に於ける或る種の反省的連結の關係を、實はそれが本來の時間關係でなく却つて無時間的な構造の關係であるといふ風に考へたが、その場合に於ける物的なるものといふのは、實は物の所謂自體として何らかの性質的心的現前態を基底に(それと共に經驗的に具體的な何らかの一物を構成すべく)、自身意味的従つて非現前的に

のみ存立してゐるところの或るものであつたのであり、之に反して心的なるものとあくまで右の如き時間的繼起關係に於いて立つと考へられる場合に於ける物的なるものといふのは、實はそれ自身既に何らかの視觸的性質を帯びつつ、現前態と非現前態といふ物の構成的兩契機を含んで、十分に經驗的具體性をそなへた意味のそれであつて、ひとしく物的なるものとは云ふものの實はその間に明かな差別があるといふことが氣附かれるのである。

ところが實は右の如く一應考へてみて事態があらためてはつきりしてくる次第であるが——右に所謂經驗的具體性をそなへた意味の「物」とは一體何であるか。その一構成面と考へられてゐる視觸的乃至觸覺的性質としての經驗的直接態といふものは考へてみれば實はそれ自身すでに「物」の單なる「刺戟」的結果であるに過ぎない。云ひ換へれば、眞の意味に於ける「物」は決してそれ自體經驗に直接現前することなく、そのやうに本來非現前的な何らかの物(そのもの)が私の身體といふ——外界的一件事象としてはやはりそれ自體決して現前して居らぬ一種の物と(——或は機械的に直接に或は光の反射を介して等——)或る關係に立ち、それによつて生じた私の身體内部の、やはり經驗的追究に對して決してその自體を現前せしめることのない一種の物的事象が先行條件となつて(これらの事柄の「經驗的」認知はそれ自身別途に同様な條件的事態を豫想してゐなければならぬ)或る感覺的性質の出現があり、差當り非空間的に心的なその直接態がや、がて意味的に所謂刺戟源泉の所在にまで「外化」し間接化した所に、はじめてかの經驗的に具體的な物といふものは成り立つてゐるのである。

その意味に於いて、かのペン先の皮膚への接觸といふ視觸的物的事象に續く或る觸覺的性質の心的出現といふ事態

に關しても、そこにペン先と云ひ皮膚と云ひ兩者の接觸と云ひ（或は更に皮膚より大脳皮質に至る或る神經過程と云ひ）、何れもその視覺的に經驗的な具體性に於いては既に、そこに反射した光の眼底への刺戟並びにその眼底に發した或る神經過程の大脳皮質への到達といふ或る物的事象の經過を豫想し、それを右の視覺的物的事象の自體的存立との間に介在せしめてゐるのでなければならぬのであつて、従つてそこにはたとひ如何程小なるにもせよ或る時間的經過といふものが考へられ、實は正にその同じ時間の經過に於いて、右の自體的な物的事象（としてのペン先と皮膚との接觸）は、それ自身別途に——接觸された皮膚から大脳皮質の然るべき箇所に至る——或る神經過程を惹起してゐる筈なのであつて、所謂心的結果的に繼起するものとしての或る觸覺的性質の出現といふのは即ちそれによるのであるといふことが考へられるのである。

それであるから、實際に經驗について仔細に内省してみても、ペン先と皮膚との接觸（の一瞬）に關する視覺的感受と觸覺的感受との二者は、その出現に關して事實全く同時的といふより外ないのであつて、その事は右の事情——即ち同一自體的物的事象に發する二途の神經過程といふもの——を考へる時當然であり、その視覺的感受に關する意味的解釋（「外化」乃至「物化」）従つて又それとかの觸覺的感受との繼起性に關する判然たる認知（反省的連結の一方向的決定）の意識の如きは、それに對して寧ろ後來的のものであるといふのが僞らぬ内省的事實であると思はれるのである。

事情右の如くであるとすると、所謂物的事象と心的内容との因果的な繼起關係といふものに於いて、そこに物的事象と謂はれるものが何らかともかくも存在的な具體性をもつものである限り、實はそれ自身その經驗的直接性的一面

に關して既に一種の所謂物心間の繼起關係といふものを暗に含んでゐるのでなければならぬといふことが考へられ、而もその暗に含まれてゐる物心間の繼起關係といふものについて、それがそのやうにあくまでも繼起のそれとして考へられてゐるのは何故であるかといふことを考へてみるならば、それは外でもなく、假にそこに自らの意識が潜み入つたと想像した場合、やはりその意識に於いて上述と同様な何らかの物的事象(の身體への干涉)に續く何らかの心的内容といふ事態がそこに經驗せられるであらうといふことが暗に考へられてゐるのによろと思はれる。さうであるとする、その場合そこに(想像的に)物的事象と謂はれてゐるものも亦、實は既に一種の經驗的具體性を(想像に於いてとは云へ)そなへたものとしてのそれであることが明白であり、その限りに於いてそれはそれ自身再びその物的存立態に關して既に物心間の繼起關係といふものを暗に豫想してゐるのでなければならず——かくてこのやうな廻行には際限が無いのである。

といふことは結局何を意味するかといへば、そこにはつまり二つの意味の含まれてゐることが考へられ、その一つは外でもなく、眞の意味に於ける物といふものが心的内容の直接的存在性に對してあくまで間接的に非存在的なものであるといふことであり、他の一つはといへば、それはつまりかうである——即ち、所謂物的事象と心的内容との間の關係が結局繼起のそれであると考へられてゐることに關し、そこに物的事象と謂はれるものが、自然的な經驗若しくは想像に關して當然である如く既に何らかの直接的存在性を具へたものとしてのそれである限り、右の繼起性は實は當然なのであつて、それは何故であるかと云ふに、その經驗的直接態は既に述べた如く實は何らかの自體的物的事象の存立から些少年らも何程かの時間的經過に於いて成り立つてゐる筈のものであり、従つてその意味的な解

釋に於ける所謂刺戟源泉への「外化」に成り立つものとしての物的事象は、嚴密に云つてそれのかやうな物的事象としての經驗的認知の現在——従つて又それと殆んど全く同時的な所謂心的繼起者の現在——からは、必ず既に何程か過去に屬する物的事象段階（乃至位相）を捉へてゐるのでなければならぬといふことが考へられるからである。而もその事は、そこに先行的な物的事象といふものが、假に自らの身體内部にまで所謂神經過程として追跡せられる場合を想像してみても、やはり同じことであつて、經驗的な具體性に於いて追跡される限りの神經過程は、その直接的存在態に關して、既に自身別途の神經過程を——或る時間的經過に於いて——豫想してゐるのでなければならず、従つてそのやうな經驗的物的追跡をどこかで遮る筈であるところの何らかの性質的心的出現者の直接的（意味的外化乃至邇源を要せぬ）現在からは、必ず既に何程か過去の（神經過程）段階を意味的に捉へてゐるのでなければならぬのであつて、従つて經驗的に追跡される限りの神經過程に對して何らかの感覺的性質的心的出現が必ず繼起的と考へられるといふことは實は當然である——云ひ換へれば、經驗的にあくまでも繼起的と考へるより外ない右の兩者の關係は實は前者が經驗的には事實後者の現在から常に何程か過去なるものを捉へざるを得ないといふことから正當化され、従つてそれは、その經驗的な必然（的繼起）性に於いて、決して神經過程といふ物的事象そのものと何らかの心的感受との關係が原理的に繼時的でなければならぬといふことを意味するのでなく、却つて何らかの感覺的性質がそれ自身、その直接の心的出現態に關して、何らかの神經過程段階を——但しその神經過程段階たるや、經驗的に追跡することの到底不可能な、經驗的に追跡される限りの物的位相を必ず何程か時間的に超え出る如き、その意味に於いてあくまで自體的に非現前的なものとしてのそれであるより外ないのであるが——そのやうな自體的な一種の物的過程をば、

時間的に自身と全く相覆うて存立する如き或るものとしてもつのであることを、寧ろ十分な理由をもつて想定せしめる如きものであるのに外ならぬのである。

即ち同じ事をもう一度云ひ換へて、一般に心的内容の直接性に對してあくまでも間接的と考へられる物的實在は、その所謂間接性をば、結局は自ら非存在的に、心的内容の現前存在と時間的に全く相覆うて、つまりその反面を成す意味に於いて成り立たしめてゐるのでなければならぬのであつて、何故と云ふに、若しその二者があくまでも時間の上に前後して所謂繼起の關係に並列するものである限り、そのやうに時間の上に並立すべくそれ自身經驗的直接性を具へたものとしての物的存在は、實はそれ自身の内に所謂物的實在態と心的現象態といふ二面を暗に含んでゐるのでなければならず、更にはその物的と心的の二面についても、亦その前者が後者に對して——所謂刺戟的規制の關係に於いて——時間的に先行するものとして考へられる限り、その所謂物的實在たる、既に何らかの存在的直接性を具へた或るものとして（さうでなければ心的内容と時間的に並列するものであることはできない）再びそれ自身の中に、その直接態を以て所謂心的現象的一面とする背後的乃至彼岸的な物的實在の他面といふものが考へられ、かくて際限は無いからである。

それ故、經驗的に具體的な物的事象の一面を成す何らかの感覺的性質について、その直接の心的出現に對して條件的に先行してゐる筈と考へられる物的事象を、その條件的な變化の相應性の次第に精密の度を加へてゆく方向へ——先づ外界的な刺戟の原因からやがて或る身體内部過程にまでといふ風に——實際經驗的に追跡して行くことを考へる時、そのやうな經驗的追跡には必ずや或る限界が、所謂條件的相應性の眞の（それ自身の）極度に達する以前に於い

て、存立してゐなければならぬのであつて、その限界といふのは外でもなく、そのやうな追跡に捉へられる物的事象の經驗的具體性を成り立たしめてゐる何らかの感覺的性質がその意味的な「外化」に於いて歸着しゆく所としての或る空間的位置（即ち當該物的事象の所在）に發する或る物的過程が、當該物的事象のそのやうな經驗的現實性を成り立たしめるべく大脳皮質の或る箇所まで波及するに要する時間と、當該物的事象自身の自體的延長が、所謂心的に出現するものとしての或る感覺的性質を成り立たしめるべく同様大脳皮質の然るべき箇所に至るに要する時間とが、（前者がより短いか）少くも等しいといふことが即ちそれであつて、この限界に至るまでの物的過程は、右の心的出現者によつて實際にその事の遮られるまでそれを經驗的に追跡することが原理的に云つて可能な筈であり、従つてその經驗的現實態に於いて所謂心的出現者に對し必ず時間的に先行するものなのであるが（經驗的に條件的物的事象と心的出現者との繼起的である外ないのはそれ故當然である）、その限界を超えて經驗的追究の最後の段階（そこでその追究は右の心的出現者によつて實際に遮られなければならぬ）に於ける經驗的認知並びに心的出現者そのものの（存在的）現在に即して——従つて當然自らは非存在的に——存立しつつ、而もそれ自身に於いて、右の心的出現者に對する條件的相應性をばその眞の極度にまで高めてゐる筈と考へられるところの、所謂當該物的事象の自體的延長は、もはやこの（經驗的追究の）同一の意識にとつては原理的に經驗の彼方なるものである外ないのである。（未完）